



Press release

LONGINES WORLD'S BEST RACEHORSE RANKINGS 2014 OVERVIEW

JAPANESE HORSES RISE TO THE TOP OF THE WORLD

20 January 2015

2014年はロンジンワールドベストレースホースランキングにおいて、日本調教馬が初めてランキングトップに立った年として記憶されることだろう。オルフェーヴル【129】とロードカナロア【128】という、2013年に非常に高い評価を得た2頭に続き、ドバイデューティフリー(G1)で2着以下を大きく引き離れたジャスタウェイ【130】とジャパンカップ(G1)を快勝したエピファネイア【129】の活躍により、日本勢がランキング上位2つを独占したのである。

ジャスタウェイは4歳となった2013年に著しい成長を見せ、123ポンドの評価を得ていたが、5歳となった3月のドバイデューティフリーではウエルキングトリクス【118】に圧倒的な差をつけ降し、更なる進境を見せた。ウエルキングトリクスがその後4月のクイーンエリザベスII世カップ(G1)でエピファネイアに先着し、また香港を代表する中距離馬デザインズオンローム【123】やミリタリーアタック【123】の上位2頭ともそれほど差がなかったことから、ドバイでのジャスタウェイの評価は確固たるものとなった。

ジャスタウェイは、ドバイから帰国後は再度同様のレーティングを得ることはなかったが、秋以降は2400m以上の競走に出走していたものであり、年末の国際ハンデキャッパー会議で再度議論するも、ドバイデューティフリーでのパフォーマンスについては依然として評価が高く、それまで発表されてきたものと同様とすることで決定した。これにより同馬は、約20年前に日本が当時の国際クラシフィケーションに参加して以降では、エルコンドルパサー【134】（1999年に凱旋門賞でモンジュウ【135】の2着）に次いで、歴代2位の高い評価となった。



LONGINES





エピファネイア【129】はジャパンカップ(G1)でジャスタウェイやジェンティルドンナ【118】相手に圧巻のパフォーマンスを見せ、同競走の勝馬としては2006年のディープインパクト【127】を超える評価を得た。ジェンティルドンナは3月のドバイシーマクラシック(G1)を制すると、12月の有馬記念(G1)も制し、シーズンを締めくくった。

全体を見渡すと、ランキングトップテンにはヨーロッパから5頭、アジアから3頭、北米と南アフリカから各1頭がランクインしている。南アフリカのヴァライエティクラブ【127】は、2013年には母国でのG1競走を勝ち120ポンドの評価を得ていたが、国外に矛先を向けた2014年には、前年からさらなる進化を見せた。同馬は香港のチャンピオンズマイル(G1)では、地元のエイブルフレンド【127】相手に圧巻のパフォーマンスを見せ、撃破した。エイブルフレンドは香港マイル(G1)を圧勝するなど、その後良績を残した。同馬は香港マイルでの圧倒的なパフォーマンスにより、ヴァライエティクラブと同等の評価を得ることとなったのである。

ヴァライエティクラブは2004年のワールドランキング創設以来、南アフリカの馬として最も高い評価を得ることとなった。また、エイブルフレンドの127ポンドについても、香港調教馬としては過去最高の評価となったのである。

トップテン入りした5頭のヨーロッパ調教馬の中で最も際立つパフォーマンスを見せたのが、仏調教牝馬トレヴ【126】である。同馬は1977・78年の愛調教馬アレジド以来の凱旋門賞(G1)連覇の偉業を成し遂げた。この時トレヴが得た126ポンドは、同馬が最初に凱旋門賞を制した時より4ポンド低いものであるが、2014年シーズン全般を通して見てみると、10月に凱旋門賞で復活を遂げるまでは、昨年ほどのパフォーマンスを見せられなかったと言える。

英・愛ダービーを制した愛調教馬オーストラリア【127】は、英インターナショナルS(G1)で英調教3歳馬ザグレイギャツビー【127】を降し、適距離でベストパフォーマンスを見せた。その後、ザグレイギャツビーは創設されたばかりの愛チャンピオンズ開催の愛チャンピオンS(G1)では、オーストラリアを僅差降し雪辱を果たした。この2頭と並び3歳トップとなったのが、マイル部門のキングマン【127】である。



LONGINES





同馬はロイヤルアスコット開催のセントジェームズパレス S(G1)を制し、この評価を得たものである。

北米から唯一トップテン入りしたのが、ボブ・バファート調教師管理馬のバイエルン **【125】** である。同馬は英調教馬トーストオブニューヨーク **【124】** とサクセスストーリーを体現するかのような出世を遂げたカリフォルニアクローム **【124】** を降し、ブリーダーズカップクラシック(G1)を制した。カリフォルニアクロームはケンタッキーダービー(G1)、プリークネス S(G1)の2冠を制したものの、ベルモント S(G1)では敗れ、惜しくも3冠達成ならなかった。

トップテンにランクインしたヨーロッパ調教馬の最後を飾るのは独調教3歳馬シーザムーン **【125】** である。同馬は独ダービー(G1)を圧勝したことによりこの評価を得たもので、独調教3歳牡馬としては1991年のロミタス **【131】** 以来の高い評価となった。また他にも、プロテクショニスト **【120】** がメルボルンカップ(G1)を独調教馬として初めて制し、ゴールドシップ **【120】** と並び、ステイヤー部門のトップとなった。

例年同様にスプリント部門におけるオーストラリア勢の層の厚さは健在で、芝のスプリント部門トップの3頭はいずれも豪調教馬である。ランカンルピー **【123】** は、2014年前半においてはこの部門の絶対的な存在であったが、11月のダーレークラシック(G1)ではテラビスタ **【123】** とシャトークア **【122】** に先着を許し、その地位を脅かされつつある。

トレヴ **【126】** とジェンティルドンナ **【118】** の他にも、特筆すべき牝馬によるパフォーマンスがいくつかあった。3歳牝馬アンタパブル **【119】** はケンタッキーオークス(G1)を制した他、ブリーダーズカップディスタフ(G1)では古馬勢を破るなど、北米牝馬ダート部門で際立った活躍を見せた。また芝部門では、英調教馬2頭が特筆すべきパフォーマンスを見せた。チャンピオン決定戦とも言える競走で一線級の牡馬を破ってきたザフューグ **【124】** は、ロイヤルアスコット開催のプリンスオブウェールズ S(G1)を制し、前年の最高値を1ポンド更新した。また、タグルーダ **【123】** は7月のキングジョージ6世&クイーンエリザベス S(G1)を制し、3歳牝馬部門のトップに立った。



LONGINES





2012年から南米調教馬もワールドランキングに掲載されることとなったが、2014年には同地区からは計20頭が115ポンド以上の評価を受け、ランクインした。ブラジル調教馬バルアバリ【120】は1月のリオデジャネイロ州大賞(G1)を制し、同地区調教馬のトップとなった。

ロンジン社副社長で国際マーケティング担当であるファン・カルロス・カペリ氏は「2014年のランキングでトップとなったジャスタウェイはその榮譽にふさわしい馬だと思います。同馬が見せた数々のパフォーマンスはトップクラスのものであります。トップクラスのパフォーマンスは、気品と伝統とともに、我が社が最も重要だと考えているものであります。」とコメントしている。

また、国際競馬統括機関連盟のルイ・ロマネ会長は以下のように述べている。「ロンジンワールドベストレースホースランキングは各馬のパフォーマンスがどのように評価されているかを知る上で、世界の競馬関係者が拠り所とするものであります。このランキングは、表彰式をご覧になってもわかりますように、ワールドベストレースホースランキング委員会各委員の努力の賜物であります。」